

戦前・戦後の国後島および釧路市における生活史の一断面： 元郵便局長 土田一雄氏への聞き取り調査記録

土田 和世^{※1}・持田 誠^{※2}

Life history of Kunashiri island and Kushiro city in Prewar and Postwar Periods: Interview survey with former
Postmaster Kazuo Tsuchida
Kazuyo TSUCHIDA ^{※1} and Makoto MOCHIDA ^{※2}

はじめに

釧路市春採に建つ釧路望洋郵便局の元局長を務めていた土田一雄氏（現在、釧路市春採在住）は、1922（大正11）年2月24日国後島の生まれである。郵便局員だった土田氏は国後島の乳呑路（チノミノチ）郵便局に勤務されていた。戦時中に標茶郵便局へ移り、やがて兵役で台湾へ赴くが、軍務中に怪我をされて帰国。ほどなく終戦となり、故郷の国後島へ戻ろうとするがかなわず、最終的に釧路市春採に望洋郵便局を開設されるに至った。2019年に土田氏から、かつての郵便局の様子を中心に話を聞いたので、当時の記録として報告したい。

■聞き取りの概要

- ・聞き取り年月日：2019年11月4日
- ・場所：土田一雄氏自宅（釧路市春採）
- ・話者：土田一雄氏（1922、国後郡留夜別村乳呑路うまれ）
- ・聞き取り：土田和世（土田一雄氏の孫で、現在、千島連盟十勝支部の事務局長を務める。帯広市役所勤務）／持田誠（浦幌町立博物館学芸員）
- ・聞き取りの内容については、録音した記録音源から文字を起こしたのち、一部については文章表記のために、省略や意味が変わらない程度に表現を改めた部分がある。
- ・話者、聞き取り者のやりとりについては、以下の記号で記す。

土田：土田一雄氏

AA：土田和世

※※：持田誠

■国後島乳呑路の時代

- ※※ ご両親も国後島のお生まれですか。
- 土田 いや、おやじは富山県です。
- ※※ お母様のお生まれはどちらですか。



図1 聞き取り調査に応じる土田一雄氏（右）。左は一雄氏の生涯について聞き取りを進めている孫の土田和世。2019年11月4日、釧路市春採の土田一雄氏自宅にて。

土田 山形県の鶴岡市か、どこかだと思います。

※※ ご兄弟はいらっしゃいますか。

土田 私を入れて6人。赤ん坊で死んだのを入れると7人です。

※※ ご両親も郵便局だったんですか。

土田 いいえ、おやじは富山で何だったのか、農家をやっていたのかな。そして、丁稚奉公だったり屋根屋をやったり、おけ屋です。

※※ どういうきっかけで国後島に渡られたんですか。

土田 富山で貧乏だったんだろうと思います。

※※ ご苦労されて。

土田 はい。北海道は明治の時代ですから、景気よかったんでないですか。それで根室へ来たんですね。根室へ来たのは屋根屋で来たんです。

※※ 屋根葺きですか。

※1 帯広市役所 Obihiro City Hall

※2 浦幌町立博物館 The Historical Museum of Urahoro

土田 根屋根を。
 ※※ その後、国後島に渡られた。
 土田 島へ渡った。
 ※※ 一雄さんがお生まれのときは、もう。
 土田 私は島で生まれて、乳呑路(チノミノチ)で。
 ※※ そのころは、おうちはまだ郵便局をされていたんですか。
 土田 いやいや。
 ※※ ずっと屋根屋さんですか。
 土田 ええ。
 ※※ 学校は乳呑路の学校に?
 土田 高等科2年の、尋常高等小学校ですね。
 ※※ 尋常高等小学校を出られた後にお勤めになったんですか。
 土田 そうです。
 ※※ そうすると何歳のころになりますかね。
 土田 私が十何歳だろう?
 A A 16歳だよ。
 ※※ お仕事に郵便局を選ばれたのは何か理由がありますか。
 土田 おやじが局長を知っていたので、それで頼んだらしいです。
 A A それは中村さんかい? 写真があるんですよ。郵便局長、中村三郎さん。
 土田 中村三郎という局長だ。
 ※※ [当時の地図(図3)を見ると] 乳呑路郵便局のすぐお隣に、中村三郎さんというお宅があるんですが、この方ですか? 当時の乳呑路の郵便局は何人ぐらい働いておられたんですか。

土田 5~6人ですね。
 ※※ 乳呑路は無集配ですか、集配局ですか。
 土田 集配です。最初は三等郵便。
 ※※ 三等の集配ですね。最初は外務ですか、内勤ですか。
 土田 最初1年は外勤をしました。
 A A 臨時集配手って外勤ということですか。
 土田 そう、そう、最初、集配手という名前だったね。
 ※※ 乳呑路の、これが昔の千島の郵便線路図なんですけど、覚えていますかね(笑)。ちょっと古いですからね。乳呑路と。
 A A 植内(ウエンナイ)と。
 ※※ 乳呑路は結構郵便局としては古いですよ。
 土田 そうですね。[明治24年に開局]
 ※※ 乳呑路まで船で来ていましたか。
 土田 船で、郵便は船で来ていましたね。陸(おか)も来ましたが。
 ※※ たぶん根室から直接来る船と。
 土田 根室から。
 ※※ 通送便の船が出ていますね。
 土田 船です。そしてトウダイ[東沸の誤りか?]の郵便局にいただいたのは、皆、陸、通送地までは馬で。
 ※※ 馬で。しめ切りの通送便ですね。
 A A 1日1人が通送夫で。
 ※※ 通送夫、1日1人。1日1便ですかね。
 A A 通送夫さん1日1人が行ったり来たりしていたと言ったよ、泊から。
 土田 泊から東沸でないよ。みんな、泊から東沸まで...

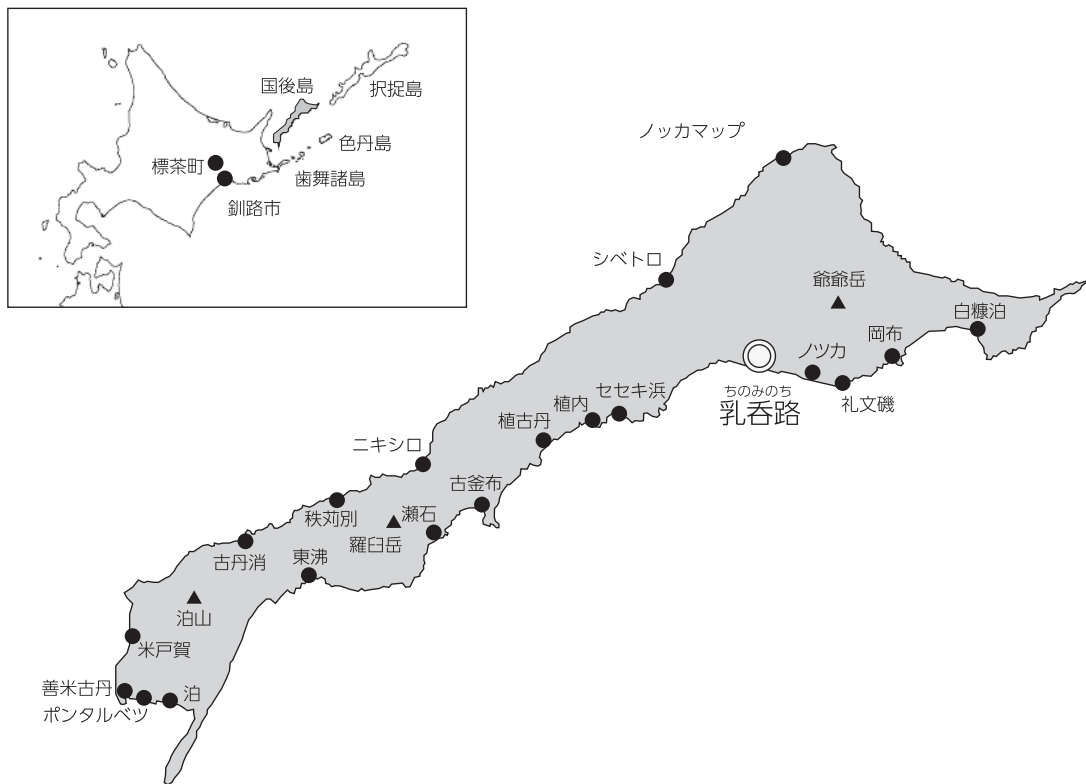


図2 国後島の位置と主な島内の地名。

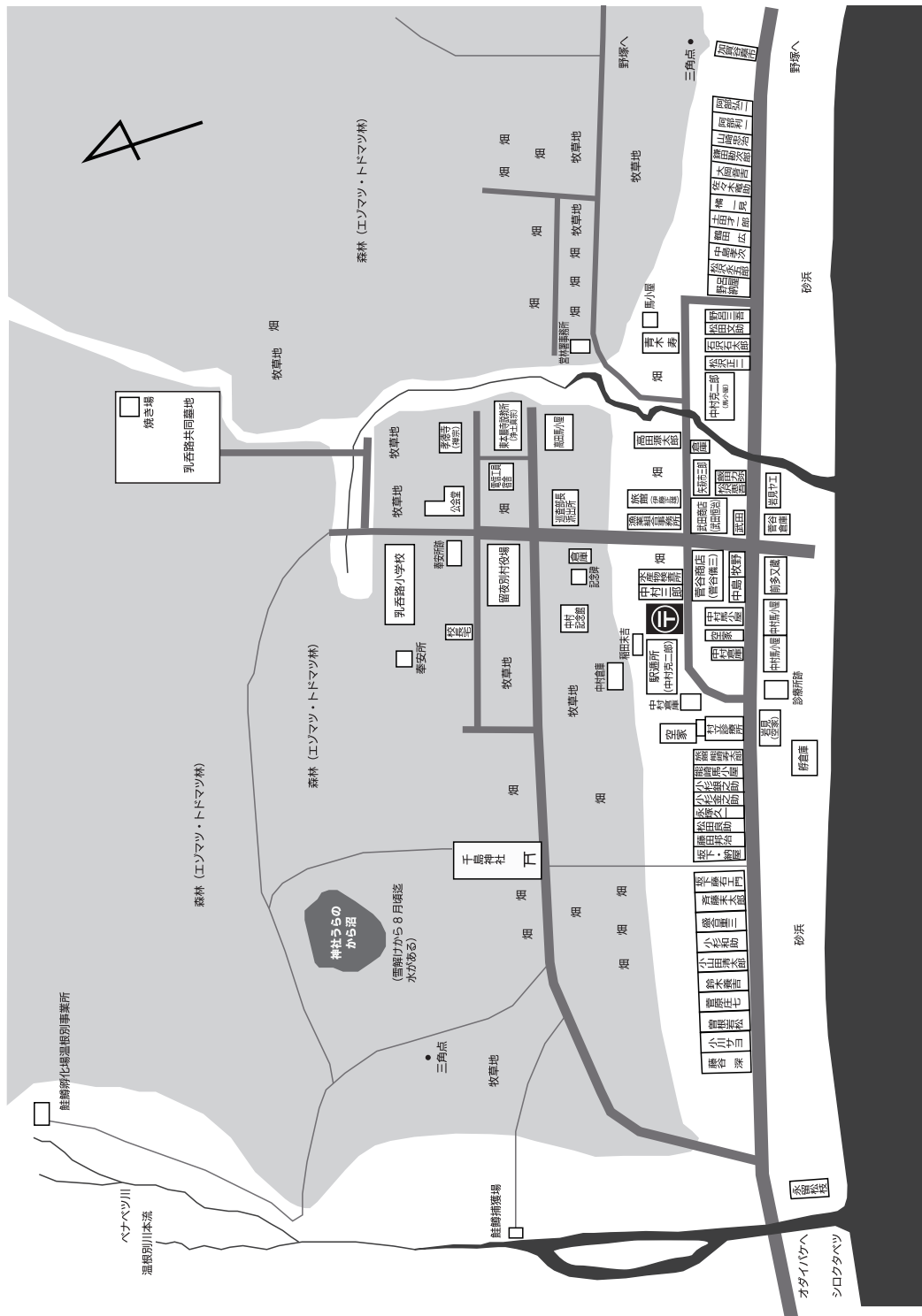


図3 土田一雄氏が暮らしていた、戦前の国後島、国後郡留夜別村乳呑路の市街地図(土田一雄氏2005年2月17日作図「北方領土・国後島留夜別村乳呑路市街地図」をもとに作成)。(注)が、土田一雄氏が勤務していた乳呑路郵便局。

A A ここに東沸ってあるんですね。
 土田 それから東沸の人が古釜布まで、途中まで持って行って、古釜布から、また途中に。
 ※※ 植内を通して。
 土田 みんな、ちょうど中間ころでもって、交換したんですよ。
 ※※ 船は毎日、入りました？
 土田 いいえ、月に、夏の昆布採りの期間でもって、2回か3回ぐらいですね。
 ※※ 昆布採りは盛んだったんですかね。乳呑路で

集配をやっていたことが1年だけあったんですね。
 土田 配達は、電報とです。
 ※※ なるほど電信か。電報は結構多かったですか。
 土田 そうですね。乳呑路は古釜布と泊よりは少なかったけど、それでも1日発着したのだから60通ぐらいだったね。
 ※※ 結構ありますね。じゃあ、1年、電報をやられて、その後は中で区分ですか？
 土田 中で2年目には内勤になったですけど、やったのは為替、貯金。郵便の受付と。

※※ じゃあ、窓口で実際とお客さんと。
土田 はい。
※※ そろばんをやったんですか？
土田 そろばんです。
※※ 為替は当時は電信ですかね。
土田 電信為替の方が小為替というのと通常為替と電信為替と、3種類ありました。
※※ 乳呑路での生活はどうでしたか？生活は郵便局で働きながら、おうちの、ご実家から通っていたんですよね。
土田 はい。
※※ 仕事は結構忙しかったですか。
土田 まあまあ・・・
※※ ずっと乳呑路の郵便局で最後まで？
土田 いいえ、それが昭和18(1943)年に標茶の郵便局へ転勤させてもらいました。
※※ ご自身の異動の希望を出されたんですか。
土田 そうです。
※※ 内地の方に行きたいなという感じで。
土田 そういう希望はずっと出せてなかったんですね。そしたら、標茶に、元古釜布の局にいた人がいたんです、知人が、ナカムラタキオといったね。
※※ これは局長の中村三郎さんの？
土田 いや関係ない。その人が古釜布にいたときに知り合いになったものですからね。それで、その人へ転勤したいという希望を、手紙を出したんですよ。そうしたら、すぐ来いという電報が入りましてね。そして昭和18年の4月だったかな、確か。
A A 4月です。
土田 4月に標茶の局に転勤した。

■標茶郵便局時代

※※ ずっと国後におられて、本島の標茶に行くというのは、ご自分の希望ですけど、決まったときはどうでしたか。不安でしたか、標茶に行く決まったときは。
土田 いや、標茶に行くこと、転勤することは不安はなかったですね。
※※ 標茶の町はどんな町かというのは、行く前はご存じだったんですか。
土田 全然知らなかった。まったく知らなかったですよ。
※※ 行ってみてから、どうでしたか。
土田 いやあ、大きなところだなと。
※※ 確かにでかいですね。
土田 当時、標茶の局は40人近くおりましたから。
A A 36人だね。
※※ 標茶ではお仕事はやっぱり内勤ですか。
土田 内勤ですね。
※※ 郵便課にいたんですか。
土田 いや、為替、貯金の方。
※※ 貯金の方で。当時の標茶の町は、かなり活気があった感じですかね。
土田 軍馬補充部の川上支部のあったところなんですよ。軍馬でもって発展していましたね。
※※ 軍馬補充部の郵便の扱いみたいなものも仕事では多かったんですか。
土田 仕事は多いですね。

※※ 標茶は郵便官舎にお住まいだったんですか。
土田 いや、郵便官舎はなかったもん。下宿屋で。
※※ 下宿はどういうところですか。
土田 下宿はだいたい中心地にあったんですけど、4～5人、5人はいたな。
※※ 下宿屋さんはお店か何かですか。下宿したのはお店か何かに下宿したんですか。普通のおうちですか。
土田 普通のうちです。下宿は馬を飼っていたですね。
※※ 駅のすぐ前ですかね。郵便局は。
土田 川を越えて……して左側へ曲がって、左側へ回る道路というのは釧路から通っている道路ですけどね。今もそのままあります。
※※ あの街道沿いですね。
土田 ええ。
A A これを昨日もらってきたんです〔と、現在の標茶町市街地の地図を見せて〕。こっちは駅で、川、駅があって、川を渡って、最初の交差点、今、のぞき精肉店というお肉屋さんがある。図書館がこの辺で、こちらだったんですよ。
※※ ここですかね。タナカ下宿と書いていますね。
土田 こっちの方が駅で、釧路から行く道はここで、郵便局はこのあたりです。
※※ ああ、そうですか。
土田 うん。ここには載ってない。
※※ 載ってないんだ。
土田 これはもう40年だかだからね。ここにあったんですよ。
※※ 今ここは編み物学校とかと書いていますね。
土田 そこまで行かない。
※※ 住友生命になっているところかな。
土田 この角に魚屋があって、そしてここに民家があって、2～3軒あって、川のそばに。こっちの方だな。
※※ 国道沿いだな。簡易軌道は乗りました？ 当時、簡易軌道も標茶に来ていたんですけど。
土田 いや、乗らない。
※※ 国鉄の標茶駅を使っていたんですか。釧路を出るときには。
土田 そうです、国鉄です。国鉄はこっちの方に。
※※ 標茶で貯金の仕事をされているときは、当時、貯金運動とかもあったと思うんですけど、学校の生徒とかで、ああいうのは実際にやられたんですか。
土田 そうです。
※※ 小学校とかに貯金通帳を作らせて何かやるようなものがありますよね。
土田 うん。各職場に団体貯金というので、やりましたから。戦時中ですから、貯金はずいぶんそれは厳しかったですね。
※※ ノルマみたいなものがあったんですか。
土田 あったです。
※※ それも結構厳しかったですか。
土田 はい。
※※ 毎月何件ぐらい貯金を取ってきたんですか。
土田 外へ出て募集はしなかったですけども、それは外勤の者がやったんです。
※※ 窓口はあまりそこまではやらない。
土田 ええ。

※※ これはよく戦争中に為替、貯金を担当していた人の話を聞くと、だんだん為替とか貯金の紙がなくなってきたと聞いたんですけど、標茶ではそんなことはなかったですか。

土田 昭和18(1943)年に私は召集を受けて兵隊に行っちゃったから。18年のころはまだそんなことはなかったですけどね。

■兵隊の話

※※ 横須賀に行かれるんですね。

土田 はい。海軍です。

※※ 兵舎もあのあたりですか。

土田 今の海軍の司令部があったけど、あそこは確かあれだったと思います。横須賀海兵団の手前ですね。

※※ 今、その場所に海上自衛隊の教育隊があるんですね、たぶんそこにおられたんだろうな。

A A 美幌で新兵教育を受けて、向こうに行った。

土田 横須賀の司令部があって、庁舎があって、その前を通って海兵団の入り口に行ってるんですね。海兵団と司令部のあるところと、近くですね。

※※ 通信隊に入られたんですか。

土田 通信隊に入ったのは台湾から戻ってからだったです。

A A 昭和19(1944)年9月か。

※※ 昭和19年。じゃあ、標茶にはあんまり長いこと、働いていなかったんですね。

土田 3カ月ぐらいしかいなかったです。

※※ そんな短いんだ。せっかく転勤したのに、すぐに赤紙が来てしまって。

土田 うん。

※※ 当時、どんな思いでしたか。

土田 当然だと思っていますよ。そのときはもうみんな、兵隊に志願して行きましたからね。

※※ 標茶の郵便局から同じように召集された人というのは当時いたんですか。

土田 いました、何人も。

※※ 兵隊に入られて通信隊に移られたのは、もともと郵便局で電信をやられていたからですかね。

土田 それはあったと思いますね。

※※ 通信隊だと、コードを担いで行って、臨時回線で通信をするような、ああいうやつですかね。

土田 いや、そういう役は通信する人にはないんですけどね。だけど、通信学校ではそういうことを訓練をやらされましたね。

※※ 通信学校に行くんですね。

土田 ええ。

※※ 戦争中にけがをされて入院するんですね。

土田 はい。それでフィリピンに行くことになって、台湾に行って、台湾の高雄というところですよ。その航空隊で、海兵団にいたときに足をけがしたんです。

※※ 高雄の海軍病院に入られる。

土田 はい。

※※ 広島の高島に帰られて、それから神奈川県熱海の病舎に入るんですか。

土田 はい。

A A 肋膜炎になるんですね。足が治った後に、こっちで肋膜炎になるんです。それで熱海に入るんですね。

※※ 熱海に入られた後、さらに草津の分院に行くんですか。

土田 草津の病院はその後です。熱海で、けがで治ったんです。それで横須賀の海兵団に戻って、そこで補充隊といって兵隊の戦地に行った、実戦に出ている兵隊が足らなくなったときは、その補充隊から派遣していたので、その派遣を待っていたところで、今度は肋膜炎をやったんですよ。そして草津の病院に行ったんです。

※※ 草津にいるときに戦争が終わったんですか。

土田 そうです。

※※ 戦争が終わったなと聞いたときは、どんな感じでしたか。

土田 何というか(笑)、あまり覚えてないですね。ほっとしたというか、何か。

※※ 戦争が終わったと聞いて、すぐにこれは解除されるんですか。すぐに兵隊さんは解除されるわけじゃないですよ。もういいよとなるんですか。

土田 もういいよと、帰れと、うちへ帰れと行って、そして握り飯2つ、3つ、このぐらいの大きい握り飯を2つか3つぐらいもらったのかな。それで病院を出されたんです。

※※ 帰れというのは標茶に帰れということですか。

土田 うちに帰れ。

※※ うちに帰れ、[国後]島に帰れと。

土田 うん。

■戦後、国後島へ帰ろうとするが・・・

※※ 戦争が終わって帰れと言われたときは、まだソ連が来てなかったんですかね。

土田 ええ。

※※ とりあえず汽車でずっと来るんですね。

土田 ええ。

※※ 青函連絡船に乗って、根室に着いたときには、もうソ連が来ていると。

土田 うん。根室に着いたのが9月1日でなかったかなと思うんですね。それで、すぐ根室の局へ行って、電信の機械を借りて、乳呑路の局と連絡したんですよ。そうしたら、ソ連の兵隊がもう入ってきていると。明日には郵便局は占拠されて、電信の機械も使えなくなるぞと、そう言われたんですね。それで次の日にもう1回、電信の機械を借りに行ったら、その通りになっていて、もう連絡ができなかったです。

※※ もう次の日はソ連のものになっていたんですか。

土田 ええ。

※※ 記録を見ると、これがちょっと不思議なんですけれども、国後島の郵便局は東沸と古丹消かな、植内と、白糠泊は昭和20(1945)年に廃局になっているんですが。

土田 廃局に。

※※ 乳呑路の郵便局だけ、昭和21(1946)年の春に廃局になっているんですね。なので、ソ連に占領された後、10カ月ぐらいですけれども、一応形としては郵便局があったことになっているんですけれども、何か聞いたことはありますか。

土田 いや、それは聞いたことはないですね。

※※ あくまでも書類上なんですかね。

土田 それはどこで調べたんですか。

※※ これはもともと国後の郵便局にいた人が、戦後、ご自分で千島の郵便局の歴史をまとめられています、その記録を見ると、泊村の国後局と、古釜布の郵便局と、それから留夜別の乳呑路の郵便局だけ、昭和21年の4月1日付で廃局になっているんですね。ただもうこのころは日本人の局員はいないだろうなと僕も思うんですけどね。でも、一応書類上はそうなっているみたいなので、ずっと不思議だなと思っていたんですね。

土田 ああ、そうですか。

※※ 択捉もそうなんですよ。択捉は全部〔昭和〕21年なんですよ。これは何でなんだろうなとずっと思っていたんですが。

土田 それは私にも分かりませんね。

※※ 昭和20年8月、だから最後のときで、乳呑路は10人、郵便局員がいたそうです。

土田 10人。

※※ ちょうど10人、記録されていますね。この人がたぶん電信を打った相手の方が入っている人数だと思えますね。

土田 いやあ、当時の乳呑路の郵便局に勤務したやつは、引き上げて来てから話を何回もしていましたけど、そんな話はなかった。

※※ 聞かなかったですか。

土田 聞かなかった。

※※ じゃあ、やっぱり実際には昭和20年の9月の2日ぐらいで、みんないなくなってしまうと、手続きのみにだけ21年ということにしたんですかね。

土田 うん。

※※ 国後に帰ろうと思って帰れないと聞いたら、やっぱりその当時はびっくりしますよね。

土田 ええ。

※※ じゃあ、根室で、もう乳呑路の方には帰れないなど。それで、じゃあ、標茶の方ということで、標茶に連絡をしたら、根室から電信を打って、また標茶にということですか。

土田 うん。

※※ 標茶の郵便局に復帰したのは？

土田 昭和20年の9月、10月ごろだと思います。

※※ 戦後の標茶でのお仕事も貯金を中心ですか。

土田 そうですね。

※※ 郵便局は戦後、どうでしたか。物が無い時代で、お金も結構大変な時代ですけど、貯金とか為替というのは結構仕事がありましたか。

土田 貯金の仕事はありましたね。だいたい金が変わったんですよ。金が変わって、それが新聞に載るんですよ。それで当時、通信局だったんですけど、札幌通信局だったんですけど、札幌通信局では連絡、郵便局へ金が変わったことや、当然、扱いのことなどを周知するのが間に合わないものだから、新聞を読んで、その新聞によってやりなさいと、そういうふうに言われたことがありますよ。

※※ 直接、局からの周知が間に合わないから、新聞を読んで、自分で判断しなさいということですね。

土田 うん。

※※ 標茶ではずっと貯金の仕事を昭和40(1965)年になるまでやられている感じですかね。もう郵務というよりは、ずっと為替、貯金畑で。

土田 そうですね。直接窓口に着くことはなかったですけど、私は局長代理をやっていましたから。

※※ 標茶郵便局の局長代理といたら、すごいんじゃないですか。結構でかいですよ。普通局でもんね。次に釧路の望洋の方に行けという話になるんですか。

土田 ええ。

※※ それは何かきっかけがあるんですか。

土田 志願なんです。

※※ 志願されたんですか。

土田 うん。

※※ 特定局。

土田 特定局長というのはだいたい志願によって、その中から選ばれて、なれましたね。だいたい特定局長は局舎を自分で持たなきゃならない。

※※ これは場所を選べるんですか。

土田 自分で選べるけど、一応郵政に申請して、承諾を得なきゃいけないからね。

■標茶郵便局から釧路望洋郵便局へ

※※ 昭和18(1943)年に乳呑路を出て標茶に行かれますよね。でも、3カ月で召集令状が来て、兵隊に行かれて、おけがをされたり、病気をされたりしているうちに戦争が終わって、乳呑路に帰ろうとしたら、もうソ連がいて帰れなくて、また標茶にお戻りになると。標茶で戦後、20年ぐらい働いたんですよ。そうしたら昭和20(1945)年から昭和40(1965)年まで。

土田 そうですね。

※※ 昭和40年に特定郵便局長を志願されて、釧路の望洋の方に行かれると。特定郵便局を志願されて、望洋のあの場所に局を建てるといふうに決めたのは、それは土田さんがお決めになるんですか。それとも。

土田 郵政〔省〕が決める。

※※ あそこに郵便局をつくれと。

土田 うん。

※※ 望洋に新しく郵便局をつくれというふうに局が言ってきたのは、理由があるんですかね。

土田 望洋は土地が戦後で、うちが増えていましたからね。

※※ 望洋は炭鉱が再び戦後に始まって、興津とか益浦とかに住宅がいっぱい増えて、それが望洋の方にも広がってきたという感じですかね。

土田 はい。あそこに団地ができていましたね。

※※ ちょうどそれが昭和40年ぐらいですか。

土田 ええ。

※※ 最初に望洋の場所を局から指定されたときは、どんな感じがしましたか。

土田 全然様子が分からない。

※※ 分からないですよ。初めて来たのはいつですか。

土田 初めて来たのは、局が建つことが決まってからですから、あれは昭和39(1964)年の秋あたりだったかと思いますね。

※※ じゃあ、前の年に望洋に郵便局を建てろよというふうに言われて、半年ぐらいで準備して、郵便局をつくるんですか。

土田 うん。

※※ それは確かに急だな。土地は郵政で用意して、上物というか、建物だけ土田さんがご負担する。

土田 いいえ。

※※ 土地も？

土田 土地も買わされる。

※※ お金はありましたか。

土田 ないよ。

※※ 借金をして。

土田 何もなかったです。

※※ 土地の広さとか、郵便局の局舎の形とか大きさは、局から指定されるんですか。この大きさで、このようにつくりなさいと。それより土田さんがご自身で設計されるんですか。

土田 いいえ。郵政が決める。

※※ 郵政の規格で決まっている。

土田 ええ。

※※ 昔はよく2階がお住まいになっているような郵便局が多かったですけど。土田さんの郵便局は。

土田 局舎だけです。

※※ ということは、お住まいを近くに建てるんですか。

土田 うん。すぐ裏に建てましたけど。

※※ すぐ裏に。それは土田さんも行ったことがあるの。

A A ある。でも、聞いたら最初は道路向かいに借家を借りたんですって。

※※ 今、駐車場として使っているところだ。

A A そう。道路向かいなので、反対側、今、駐車場かな。そこに借家を借りて済んでいたんだけど、数年後に局舎の裏にくっつけて、完全にくっつけて、おうちを建てて住んだと。そこは私も小さいころ知っていて、小学校1年生になったときに、この家を建てて引っ越ししているので、それまではすごく小さい記憶だけど、写真もあるし、行ったこともある。何年か前に家がくっついているのはだめみたいになって、今は家部分をずっと人に貸していたんだけど、その人も亡くなったからといって壊したんです。

※※ 今、空き地になっているところだ。

A A そうですね。昨日探したら、家を建てたときの写真がちょっとあって、おばさんに聞いたら、私は最初からくっついた家をつくったと思っていたんですよ、局舎。そうしたら違って、向かいに最初は住んでいて、何年かして家を建てたんだよと言って、教えてくれましたね。

※※ 最初は郵便局の道路を挟んで、反対側のところに借家みたいな感じでお住まいで、その後、こちらの後ろ側にご自宅をつくるという感じですかね。

土田 これ。

A A 違うかな。

※※ 望洋の春採の通りで、望洋の郵便局があって、今、こっち側に望洋郵便局の駐車場がありますけれども、あの駐車場がある場所に、もともと最初は。

土田 なかった。

A A 最初、借家に住んだんでないの、おじいちゃん。望洋郵便局を建てて、初めて来たときはまだ裏におうちがなかったから、道路の向かい側の借家に住んでいたんでしょ、一番最初ね。

土田 うん。

A A 信号機を渡ったところね。何かお店と借家がくっついた建物だったんだね。

土田 この辺は全部空き地だったんです。

A A 何年くらい借家にいたんだい？

土田 何か月かだった。

A A すぐ裏に家を建てたんだもんね。

土田 うん。

※※ 数カ月だ。当時、このあたりは結構家は多かったんですか。

土田 いや、あんまりなかったですね。

※※ 学校はありましたか。

土田 学校はこっちの方に。

※※ もうすでにここに、中学校。

土田 ええ。

※※ あとは空き地が多い感じで。

土田 ええ。

※※ じゃあ、最初、郵便局を建てたばかりのころは、あまりお客さんは来なかったですか。

土田 いや、それでも。団地の人が来る。

※※ どういう人が最初のころ郵便局に来ていたんですかね。

土田 炭鉱の人が多かったですよ。

※※ やっぱ炭鉱の人が多い。

土田 うん。ここに局ができる前は、下の、今、若草町、あの辺にあった春採郵便局へみんな、ここから行ったんですよ。だから、ここの望洋ができたので、大した便利になったんですか、こちら辺。

※※ 今の若草の方に元春採局があったんだって。

A A 若草って。

※※ 若草ってもっとずっと下の方だよ。

A A でも、ちょっと家はあるんですよ。望洋局舎裏に新築する家、団地の隣に、この団地はたぶん私は知っているんですよ。昔の2階建てのおうちがあった。だから、そこそこ家はあった。今、何もなかったと言ったけど、ちょっとあったんじゃないかな。

※※ この団地は覚えていますか。こんなのが近くにあったのは。

土田 覚えているよ。これは市営でない、道営の。

※※ 道営住宅。

土田 道営住宅だったと思いますよ。ここに2棟か3棟。

A A 2棟か3棟。これが郵便局でしょう。

土田 そうだ。だから、今、バス停がこちら辺にあるでしょう。

※※ ありますね。

A A これは急な下り坂で、こういうふうに大きい通りが通っていて、曲がって下る感じなんです。今、ここが駐車場、裏の下のところが。

※※ そうですね。団地は道営住宅か。

A A ほろいのがあったんですよ。今、全部なくなっちゃったけど。

※※ 道営住宅があったということは、近くに銭湯は

ありましたか。お風呂屋さんはありませんでしたか。

土田 風呂屋は。

A A 望洋湯はあるね。ある。

※※ まだあるのかな。

土田 あったかな。

A A ない。

※※ もうないよね。望洋湯というのかな、何かお風呂屋さんが。

土田 片岡さんがやっていた。

A A 片岡さんの道路を挟んで反対側に望洋湯ってあったね。

土田 うん。

A A 今、もうなくなっちゃったね。

土田 なくなっただなあ。

A A でも、私は帯広に行ってからもお母さんに行っているから、といっても18年たっているから。

※※ 土田さんのうちは内風呂。

A A 内風呂。五右衛門風呂だったかな。

※※ 五右衛門風呂。

A A おじいちゃんのうちのお風呂って五右衛門風呂みたいな丸いお風呂でなかったっけ。

土田 そうだ、丸い。

A A 何かこのとき丸い風呂だったよね。

土田 うん。

※※ 燃料は、風呂をたくのは石炭ですか。

土田 石炭。

A A 何かこんな、小さい記憶、でもこんな風呂だった。一緒に住んでいるおばさんが建築士さんなんですよ。この家と標茶の家と、今度、図面を描いてと頼んでいるから、もらったら見せますね。

※※ 自分のお金で郵便局を建てなきゃいけないじゃないですか。

土田 うん。

※※ 最初は理不尽だなと思わなかったですか(笑)。

土田 それが特定だ(笑)。

※※ そういうお金を、建てるときの資金を郵政の方で融資してくれるような、そういった制度はあるんですか。

土田 いや、それは郵政でなくて、特定局局長会がそういうのを。

※※ 特郵の。

土田 あって、そこで貸してくれたんですね。

※※ このころはこちらの春採かいわいで特定局というのはいすでに何局かあったんですか。春採の局と。

土田 白樺台もありましたね。

※※ 白樺の方が先?

土田 白樺台は、俺が来たときあったと思うね。

※※ 確かに太平洋炭鉱があるからな。

土田 それから城山とかね。南大通。

※※ 桜ヶ岡はまだないですよ。

土田 桜ヶ岡。

※※ ええ。

土田 桜ヶ岡はあった。

※※ ありましたか。

土田 ええ。

※※ じゃあ、望洋は結構後の方で、新しくできた方の郵便局ですかね。

土田 そうですね。

※※ 最初、来たときの望洋の周りの様子で何か印象に残っていることはありますか。お買い物はどこでしたか。

土田 買い物は太平洋炭鉱の購買と言っていたかな、そこが今で言えば、あの辺だな、交番があります。ここから移っていった新しい。あの辺だったな、確か。炭鉱の労働組合がつくった購買所がありましたね。そこで買い物をするんですよ。

※※ そうですか。面白いな。ほかに行くときは、もうバスは通っていたんですよ。

土田 はい。

※※ 郵便局は何時から何時までですか。

土田 郵便局は8時半から5時まで。

※※ 小包とか電報とかも扱っていた感じですか。

土田 はい。

※※ 電報は何年ぐらいまでやっていましたか。

土田 電報はいつまでやっただろうか。

※※ まだ来たときはやっていましたよね。建てたときはまだ電報をやっていましたよね。

土田 やってあった。

※※ 標茶にいたころと、望洋に郵便局を建てて、郵便局長になれますよね。

土田 はい。

※※ 生活はだいぶ変わりましたか。

土田 変わりました。

※※ 楽になりましたか。

土田 いや、苦しくなった。

※※ 苦しくなった。どういうところが苦しかったんですか。

土田 給料は変わりなし。

※※ 給料は変わらない。

土田 うん。そして借金をしたので、その借金を給料から払うと、生活費が非常に苦しかったんですね。

※※ 局員は下に何人おられたんですか。

土田 最初3人。3人というけど、局長を入れて3人です。

※※ ご自身を入れて3人。

土田 うん。

※※ 奥様もやっていたんですか。

土田 いや、やってない。

※※ じゃあ、土田さんを入れて3人だ。少しずつ増やしていったんですか。最終的には何人まで増やしたんですか。

土田 5人です。

※※ これは郵便局の建物の借金を返し終わるのまで何年ぐらいかかったんですか。

土田 局長を辞めるまで。辞めるまではかかったな、確か。

※※ それは確かに大変ですね。

土田 うん。

※※ 一番最後、辞めるのは何年ですか。

土田 昭和40(1965)年。

※※ 40年から始めて、退職されたのは何年でしょうね。

A A 昭和61(1986)年です。昭和61年まで借金を返していたの。

土田 うん。
A A すごいね。
※※ それは本当に大変でしたね。退職したときは、まだその家に住んでいたの。
A A 〔昭和〕61年退職だとしたら、私はまだ3歳とかなので。計算でいくと、私が小学校に入ったときにこの家ができてはいるはずなので。
※※ 退職した後もそこに住んでいたということ？
A A 住んでいたと思うな。
※※ 郵便局長を退職された後も、郵便局の後ろのおうちにはずっと住んでいたんですか。
土田 1年住んでいましたね。
A A 1年住んでいた。私が思っている時期より早いな。
※※ じゃあ、昭和62(1987)年までは局のお隣のうちに住んでいる。
土田 うん。
A A 昭和61(1986)年、62年、63年、私が5歳、まあ、だいたいそうかな。
※※ そのころ。
A A 小学校のときは、もうこっちなんですよ。
※※ じゃあ、そうだね、そのころだね。これはやっぱり郵便局を退職されるということを考えて、このおうちをお建てになられたんですね。
土田 はい。
※※ ということは、郵便局の局舎の借金を返しつつ、この新しいうちを建てるためにまたお金を工面しなきゃいけなかった。
土田 退職手当。
※※ 退職手当をつぎ込んでということですかね。それは、でも本当にご苦労なさっていますね。昭和62年というと、ちょうど国鉄が民営化するところですけど、郵便局の民営化の話は当時はどうでしたか。まだなかったですか。
土田 まだなかったですね。その後ですね。
※※ 望洋郵便局に、そうすると20年、22年か、お勤めになっていたということですかね。
土田 はい。
※※ 22年間で望洋の周りだとか、郵便局の仕事だとか、いろいろ変化があったと思うんですけども、どういう部分で生活とかお仕事とか、変化がありましたか。
土田 うちはどうも増えていったから、窓口は忙しくなったですね。
※※ 郵便の取扱量のピークというんですかね、一番忙しかったのは何年ごろですか。
土田 そうだな。
※※ 最初のころと退職するころだと、どちらの方が忙しかったですか。
土田 退職するころが忙しかったです。
※※ 昭和62年だと、まだ郵便は盛んだった時代だと思いますけれども、一方でクロネコヤマトとかの宅急便が出てきて、郵便小包にゆうパックという愛称が付いて、ちょうど競争が始まったところだと思うんですけども、小包の量とかは少しずつ減り始めたところですかね。そうでもない。釧路だと。
土田 そのころはもう、クロネコはもっと早いときから

やっていたから。
※※ 年賀状とか、そういうのはどうでしたか。
土田 年賀状は発行は多くなって、最初のころのように、最初の発売日の初日がすごかったですけど、辞めるころ、60年ころになったら、もうそういうことがなくなったですね。
※※ 昭和40年ごろはやっぱり発売初日にみんな買いに来ていたんですね。
土田 ええ。年賀状……気分的には苦しかったですよ。
※※ 気分的に。
土田 みんな顔を知っているお客さんばかりが。
※※ そうですよ。買って、買ってとやらなといけな。い。
土田 いや、お客さんから売ってくれと言われて。
※※ 逆に売ってくれと。
土田 並んで買ってもらわなきゃいけなかったから。
※※ そうか、待たせてしまうので、それが心苦しかったなと。
土田 うん。
※※ 郵便の仕事をしていて一番楽しいと思うことって何かありますか。大変なことの方が多かったですかね。
土田 うん。
※※ 局長ですから、いろいろ気苦労も多いですよ。望洋の郵便局を最後退職されるころは、建物はずっと同じですか、40年から最後退職されるまで。
A A 1回変えたと、おばさんが言ったんじゃないかな。
土田 五十何年だったか、建て替えたんだ。
※※ 昭和50年代に1回建て替えはしたんですね。
土田 うん。
A A 確か屋根が違うんですよ、最初の。
※※ 同じ場所に。
A A 同じ場所。このときのと、これが郵便局の裏で今がこれで。
※※ 四角いね。
A A ちょっと違うかなと。おばさんに昨日聞いたら、1回建て替えたんだよと言って、それで今、これだから、今、ここに耐震補強が入って。
土田 建て替えたのは、今の柴田病院、双葉建設の事務所でもない、何か倉庫みたいなのがあったんですよ。そこを借りて、仮局舎で。
A A へえーっ、そうなんだ。
土田 あのころ、ちょっと建物が何かあれですね、倉庫みたいな建物だったので、防犯上の心配があったんですね。
※※ 防犯上はね、確かにね。仮局舎はどのぐらい、半年ぐらいですか。
土田 1年はなかったけど、半年ぐらいだったかな。
※※ 昭和40年に新しく建てた局舎をだいたい10年ぐらいで建て替えたということですかね。
土田 うん。
※※ それは狭くなった。
土田 狭くて。
A A それはかかるわな、借金もしているから。4軒建てている。

※※ だいぶ広くした。だいぶ窓口とか待合室を広くした感じ。

土田 ええ。

※※ 郵便局のキャッシュカードの機械が入ったのは、ATMが入ったのはいつぐらいからですかね。

土田 ATMが入ったのだったら、だいぶ後だね。

※※ だいぶ後ですかね。新しい局舎はもう入っていますよね。たぶんそれもあるのかな。

土田 ええ。

※※ 昭和62年(1987)までだと、郵便局は半ドンでしたかね。

土田 半ドン。

※※ 土曜日って午前中だけでしたよね、昔。

土田 うん。私のうちは、変わってなかったな。

※※ 土曜も普通にやっていましたか。

土田 うん。

※※ 郵便局の常連さんで変わったお客さんとか、困ったお客さんとかはいなかったですか。

土田 困ったお客さんは、裏の団地に生活保護を受けていたおやじさんが、酔っ払うと窓口に来て、乱暴したことがあったですね。

※※ それはお金を貸してくれとかいう、そういうことですか。

土田 そんなことでなくて、何で怒ったか分からなかったけど、忘れたけど。

※※ 外国人とかはあまりいなかったですか。

土田 外国人はいなかったですね。

※※ 最後のころは炭鉱の人が少なくなってきたでしょう。

土田 うん。

※※ 普通の勤め人が多くなってきて。

土田 うん。

※※ 男の人も女の人も同じように利用していましたか。

土田 そうですね。

※※ 戦後、望洋に来てからも貯金の営業とか、そういうのでお出掛けになったりはしたんですか。貯金や保険の営業で外に出ることもあったんですか。

土田 私はやらなかったですね。

※※ 分かりました。裏の団地に生活保護を受けている人がいて、酔っ払うと窓口に来て暴れて、それが大変だったという話でした。

※※ 土田さんが局長だったときに、一緒に働かれていた方はまだ望洋郵便局で働いている方がおられるんですか。

土田 いないね。

※※ 今もやりとりはあるんですか。

土田 やりとりしているのは何人もいましたよ。

A A OB会の会報を作っていたりとか。

※※ 特郵の。

A A そう。

土田 あったな、何だっけ。クレソンとか、それから行者ニンニクか、あれを持ってきてくれるの。

※※ 今も特郵の人たちとはそういうOB会とかで、しょっちゅう顔を合わせたり、いろいろされるんですね。

土田 はい。

※※ 今の望洋の土地は土田さんの土地ではないんですか。

土田 土地ですか。今は望洋郵便局の局舎の土地も私のものです。

※※ まだ土田さんのものなんですね。じゃあ、お貸ししている形になっているんですか。

土田 はい。

A A そう言っていた。エアコンとかは勝手に付けているけど、自動ドアの工事とか耐震工事はお婆さんが一応。

※※ じゃあ、大家さんなんだ。

A A 家賃収入も。

※※ ここに引っ越されてきたのは、ここは売り出しされていたんですか。

土田 ここは売り出し。太平洋炭鉱の太平洋興発。

※※ 興発さん。

土田 うん。

※※ ここはずっと電車が、炭鉱電車が走っていたところですよ。

土田 そうです。

※※ うるさくなかったですか。

土田 全然何も聞こえないですよ。

※※ 今は静かでいいところですね。

土田 うん。

※※ 今も標茶のこととか、国後のこととかをよく思い出しますか。

土田 思い出すね。鳥のことはもう毎日思い出すね。

※※ 当時の景色はまだ今でも頭の中にはっきり覚えている感じですか。

土田 そうですね。鳥の爺爺山とか、それから乳呑路の風景とか、もうはっきり浮かんできます。

※※ じゃあ、本当なら1回帰りたいところですね。

土田 はい。

※※ 今の望洋のこの暮らしと、昔の千島の暮らしと、それから標茶にいたころと比べると、どの時代が一番いいですかね。

土田 そうですね。貧乏をしていたけど、やっぱり鳥のあれが。

※※ やっぱりよかったですか。そうしたら本当に早く行ける機会があるといいですけどもね。

土田 はい。

※※ いろいろ昔のことを、ありがとうございます。

土田 いいえ、いいえ。

※※ お孫さんがこれからいろいろまとめるみたいですから、頼もしいですね。

おわりに

本稿は、国後島の国後郡留夜別村乳呑路に生まれ、戦時中の兵役を挟んで、標茶町、釧路市で暮らし、釧路望洋郵便局の開設にたずさわった土田一雄氏の聞き取り調査記録である。紙幅の関係で本稿は聞き取りの記録に留めた。今後、土田氏の回想をもとに、土田氏所有の当時の写真や関連資料との照合、現在の国後島の様子などをまじえた考察などを進めていく予定である。